

80年前の骨にまで刻まれた屈辱の歴史を決して忘れない

—母李秀英が南京大虐殺中に受けた被害—

陸 玲

私は陸玲と言ひ、南京大虐殺幸存者李秀英の次女です。

私の外祖父李松山は山東省鄆城県李家庄の出身で、子供の頃から武術を学び、大人になると運送業社で用心棒をし、後に南京漢中門の警察署で働きました。外祖母李湯氏の家は南京清涼山大竹園にありました。母李秀英は1919年2月24日江蘇省南京市で生まれました。外祖母は進歩的な女性で、外国製品をボイコットし、民族工業を保護する学生運動を支持していました。この事は幼い母へ大きな影響を与えました。母が13歳の時外祖母は亡くなり、その時から母は弟や妹の世話や家事の負担を背負いました。

私の父陸浩然是1911年10月天津市東門二道街で生まれました。16歳の時友人と共に南京へ丁稚に行き、学校へ通ひ、卒業後は上海川沙県の政府機関での電報の送受信係に配属されました。1936年10月、17歳の母親は知人の紹介で父と知り合いました。外祖父は結婚するのなら、弟（私のおじ）と一緒に陸家へ行くよう要求しました。1937年3月、満18歳の母は弟の李振声を上海川沙県へ連れて行き、父と結婚しました。8月13日淞滬戦争が勃発し、川沙県は安全ではなくなりました。10月に母は弟を連れ南京に戻り、外祖父の家に身を寄せました。11月に父は118師団と共に武漢に移転する際南京を経由し母を連れて行こうとしましたが、母はその時身をもっており行けなかったのも、おじの李振声を連れて行くことにし、母の事は外祖父に保護を頼みました。

1937年11月、南京で国際安全区が、そして、12月1日に国際赤十字会南京支部が設立されました。12月4日外祖父と母は安全区内南京五台山付近のアメリカ人が経営する学校の地下室（現在の南京五台山幼稚園）に身を隠すよう割り振られました。地下室は男性用と女性用に分かれていました。

1937年12月13日日本軍は南京を侵略し占拠しました。南京陥落後、武器を持たない住民は残忍非道で狂気じみた日本軍による血なまぐさい大虐殺の餌食になりました。国際赤十字会の保護を受けていた国際安全区内の住民もこの難から逃れられませんでした。

12月18日日本軍の一団は母が隠れていた地下室の男性部屋に押し入り、たくさんの青年男性を無理矢理連れ去りました。隠れていた難民たちの夫や息子たちが連れ去られパニックになりました。

12月19日午前、日本軍の一団が今度は地下室の女性部屋に押し入りました。彼らは母を含む若い女性を無理矢理連れ出し、車に乗せようしました。その様子を見ていた母は日本軍に連れ去られると強姦されるか殺されると思い、自身の純潔を守るため死

んでも屈しない覚悟で頭を壁にぶつけ気絶してしまいました。日本軍は床に倒れた母を蹴り飛ばしましたが、母が身ごもっているのを見て、他の若い女性たちを連れ去りました。友人たちが気を失った母を抱えて地下室に戻し、唯一あった荷物用の台の上に寝かせました。夕方3人の日本兵が又地下室の女性部屋へ押し入りました。一人は大きな刀を抱えた士官で、2人は銃を抱えた兵士でした。兵士の一人が30歳位の女性を引っ張り出しました。士官は荷物用の台の上で寝ている赤いチーパオと青い上着を着た母を見つけました。彼は他の人を追い出し、“娘さん”と声をかけ、腰を曲げ母の服についたボタンをはずし強姦しようとしていました。驚いて目が覚めた母は一本の刀の柄（つか）がすぐ近くにあるのを見て、無造作にそれを引き抜き日本兵に命がけで挑みました。その時彼女は無駄死にしないよう懸命に闘おうとしていました。刀が引き抜かれた事を知った士官は驚愕し、すぐに両手で刀を持った母の手を掴み、同時に大声で叫びました。そのはずみで母は起き上がり、もう片方の手で士官の襟を掴み、壁のすみへ引っ張り取っ組み合いになりました。その時叫び声を聞いた2人の兵士は捕まえていた女性を離し、銃剣を抱えて母に突進してきました。それを見た母は士官の体を盾にしようと胸の前に持って行きましたが突進して来た2人の日本兵は左から一人、右から一人が母の足や顔を突き刺し殺そうとしていました。母は左右の足を何十回も刺され、鼻と口は刺されて裂けました。右目の下の部分も刺されてめくれ、目がほとんど見えなくなりました。彼女は口の中の鮮血を日本兵に嘔きつけ、命がけで抵抗し続けました。一人で3人の日本兵相手に奮闘しましたが、出血多量で体力が続かず、日本の士官を捕まえていた手の力がなくなり動かなくなりました。日本兵は母のおなか目がけて一突きし、母はすぐに血だまりの上に倒れ瀕死の状態になりました。おなかの中にいた6ヶ月半を過ぎていた母の一人目の胎児は刺殺されました。

3人のフル武装の日本兵は国際赤十字安全保護区の地下室に押し入り、まだ19歳の6ヶ月の子を身ごもった武器を持たない女性を強姦しようとしていましたが、思いがけず母の命がけの抵抗にあいました。友人たちは体中傷だらけで血まみれの母を見て非常に敬服し、又非常に同情し嘆きました。

日本兵が去ると、友人は外祖父の李松山を呼びました。彼は全身血だらけの母を見て娘がすでに死んでしまったのだと思い、大声で叫びました。耐えられない心の痛みを抱きながら、一人の年配の友人と裏山へ行き、埋葬のための穴を掘りました。ところが母は地下室から運ばれる時、12月の凍てつくような寒さの南京の冷たい風に当たると口から泡を吹き出しました。母はまだ絶命していなかったのです。友人たちの助けをかり、祖父は母を南京鼓楼医院へ連れて行きました。アメリカ人外科医のロバートウィルソンは母に応急手当を施し、刺し殺された腹部の胎児を取り出し、顔の傷を縫合し、両足の傷口に包帯を巻きました。その時母の頭部は大きくむくみ、上唇は切れ、歯はぬけ食べたり飲んだりすると鼻から全て流れ出しました。

アメリカ人のジョン・マギーは1937年12月22日の日記にこう記載していま

す。「今日私は鼓楼医院でこのような状況の人を見ました。6ヶ月半の子供（第1子）を身ごもった一人の19歳の娘さんが日本兵に強姦されかかり抵抗した際、顔に7ヶ所、足にも8ヶ所、おなかには1ヶ所2インチもの深さの刀傷を負い、その刺し傷により流産しました。医者たちは彼女を救うため今治療を施しています。」ジョン・マギー先生は母が鼓楼医院で治療を受ける様子をカメラで記録しています。

南京国際安全区国際委員会主席のラーベ先生も母を見舞いに医院へ来ています。南京に残っていたこれら海外の友人たちは母が強姦時に恐れず素手で3人の日本兵に立ち向かい、自己の尊厳と民族の気骨を維持した精神に敬服しました。彼らの保護の下母は命拾いをし、奇跡的に生きながらえました。母は鼓楼医院で70日間入院した後鼓楼珞珈路25号の難民区で半年過ごしました。1938年末幾度も各地を転々とした後南京に戻った父は南京大学の難民区で母を探し出しました。しかし父は若くて美しかった妻が日本兵による残虐行為で見る影もなく変わり果て、傷跡だらけになった様子を見て再会できた喜び以上に心の底から悲しみと憤りを覚えました。ジョン・マギー先生は自ら父に母を引き渡し、大勢の人が南京で虐殺された中、日本兵と命がけで格闘し、幸い生き延びた母を大切にする様何度も父に言いました。

1945年8月15日、日本は投降を宣言し、中国人民は抗日戦に勝利しました。1947年南京軍事法廷が開かれ南京大虐殺の主犯である谷寿夫を公開の法廷で審理しました。母李秀英は日本軍国主義が中国を侵略し、南京で30万人の同胞を虐殺した際を目撃者、被害者、生き証人として出廷し証言しました。1995年日本の心に刻む会の招きに応じて同会が東京、大阪、名古屋、仙台、盛岡、広島、長岡、新潟、松本、静岡などで開催したアジア太平洋地区戦争犠牲者追悼集会に置いて、南京大虐殺の史実を証言しました。

南京大虐殺は中国人民、南京人民、そして母と私達家族の全てに大きな傷を与えました。私は1942年に生まれた生存者の娘ですが、37ヶ所もの刀傷を体に負い、顔も数ヶ所刀で切られた母が、身体や心に大きな傷を受け苦難に満ちながらも気丈に生きてきたのを子供の頃から見てきました。障害により母は労働能力を失い、死ぬまで働けませんでした。真相を知らない人たちは容貌の破壊に対し尋常ではない視線を投げつけ、身体と精神が受けた傷は一生続きました。

私の母李秀英は強靱な精神を貫き、9人の子供を育てあげただけではなく、自身が経験した血生臭い心に刻みついたあの歴史を何度も各所で口述し、毎回自身の苦痛に満ちた記憶と、かさぶたになった傷跡をさらけ出し、南京大虐殺によって殺された同胞たちの無実を訴えました。彼女は幾度も平和集会の活動に参加し、歴史の常夜灯のあかりが消えない様、歴史が渴望する世界平和を警告する大時計の響きを心に刻み、歴史を忘れず、戦争に反対し、平和を熱愛するよう人々に呼びかけました。

2004年12月4日、母は病によりこの世を去りました。彼女は日本軍国主義を憎み、戦争を恐れ、37ヶ所の刀傷を負い、世界平和を待ち望みながら私達の前からい

なくなりました。

2005年1月20日、南京大虐殺の幸存者である李秀英が日本の右翼作家松村俊夫及び日本の出版社展転社の発行人相澤宏明を名誉毀損で訴えた案件で、日本の最高裁判所において勝利判決が確定しました。母はこの日を待つことなく亡くなりましたが、南京大虐殺の歴史的目撃者として戦争に反対し、平和を熱愛し、人類の平和のために奮闘した姿を私達はいつまでも忘れません。

